

2022年1月16日

年間第2主日

菊地功大司教 メッセージ

ヨハネ福音は、よく知られているカナの婚姻の奇跡物語を記しています。公生活を始めたイエスが、最初に行った奇跡として知られているのが、招かれたカナの婚姻において、水をぶどう酒に変えたというこの奇跡物語です。婚姻の宴は聖書、特に福音の中で、しばしば神の救いや神の支配の実現を例えるために用いられています。イザヤも、神の支配が実現することの喜びを、「花婿が花嫁を喜びとするように、あなたの神はあなたを喜びとされる」と記します。

すなわち婚姻の宴のように、あふれんばかりの喜びと希望に満ち溢れているのが、神の救いであり、神の支配の実現であるとされています。その意味で、宴を盛り上げるのに欠かせないワインが枯渇することは由々しき事態であり、イエスは水をワインに変えて、しかもそれを溢れんばかりに与えたと記すことで、救いにおける喜びの源は救い主イエスであることを、福音は明示します。

ヨハネ福音は、イエスが救いの計画を実現するために神の「時」を自覚して行動していたことを、最後の晩餐において弟子たちの足を洗う場面の直前に、「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り」と記すことで明らかにします。しかしこのカナの婚姻では、聖母に対して「わたしの時はまだ来ていません」と答えています。神ご自身が定めた「時」を変えさせたのは、聖母マリアの信仰とそれに基づく確信です。カナの婚姻の出来事に、わたしたちは、聖母マリアの取次の力と、神の救いの喜びと希望に寄与する聖母の存在の重要性を見出します。

コリント書は、聖霊のたまものが与えられた神の民は、それぞれが与えられた賜物によって多様な働きを実現し、それが同じ聖霊に導かれていることから、一致をもたらしていることを記します。

喜びと希望に満ちた神の救いと支配の実現のためには、聖霊に導かれて、多様性のうち

に一致していることが不可欠です。

教会は、1月18日から25日までを、キリスト教一致祈禱週間と定めています。今年は、マタイ2章の「私たちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」をテーマに掲げ、特に中東の諸教会のために、また人々のために祈ることを求めています。

一致祈禱週間のために用意された資料には「中東の歴史は、昔も今も、紛争と対立にあふれ、血に染まり、不正と抑圧により暗雲に覆われています。・・・この地域では血なまぐさい戦争や革命が繰り返され、宗教的な過激主義が台頭しています」と記されています。

第二バチカン公会議のエキュメニズムに関する教令は、次のように指摘しています。

「あたかもキリスト自身が分裂しているかのようである。このような分裂は真に明らかにキリストの意志に反し、また世にとってはつまずきであり、すべての造られたものに福音をのべ伝えるというもっとも聖なる大義にとっては妨げとなっている(1)。」

ただ単に一緒になればよいものでもなく、同じ祈りを一緒にすれば済むものでもない。それよりも「公正と真理に基づいて」互いのことをよく知り合い理解を深め、適切な対話を行って一致して福音を証ししていくことができる道を探っていく努力を、この教令は求めています。

今回のシノドスの歩みも準備文書で、「一つの洗礼によって結ばれた、異なる信仰告白をもつキリスト者間の対話」の重要性を指摘し、その具体的な行動について問いかけています。神の救いと神の支配の実現がもたらす本当の喜びを共にできるよう、多様性の中で一致して歩み続けたいと思います。